

正倉院は奈良東大寺だけではない

下野市教育委員会 生涯学習文化課

今年も10月22日～11月7日の期間に、奈良国立博物館で正倉院展が開催されます。開催は今年で68回目となります。第一回は終戦の翌年、昭和二二年に開催されています。明治八年以降、何度か御物が展示され、昭和十五年には皇紀二六〇〇年記念として東京帝室博物館（現…東京国立博物館）で正倉院御物展が開催されました。第一回開催については、戦後の混乱期でその日の生活を送るのも大変な頃でしたが、あえてこのような文化的な展覧会を開催し日本の伝統と文化、文化財を再認識することで、敗戦により誇りを失った日本人に良い意味での国威発揚を促す効果を期待したとされ、その目的が功を奏したのかかなり多くの入館者数があり、好評だったと記されたものを拝見したことがあります。

ここで改めて「正倉院」について少し記します。既に多くの方がご存知かとは思いますが、正倉院展の正倉院は奈良県にある大仏で有名な東大寺に帰属する倉庫です。かつて東大寺には正倉と呼ばれる倉が複数棟ありました。長い歴史の中で多くが失われ残ったのが聖武天皇と光明皇后の遺品を納めた一番大きな倉でした。これらの倉を塀や垣

根で区画し独立した存在にすると「院」となり「正倉院」となるわけです。「院」には独立した施設の意味があります（衆議院・参議院、人事院、病院、学院）、院政Ⅱ天皇、上皇の独立した住まいを指し、そこで行われた政治など）。

また、「正倉」とは本来「正税しようぜいを納める倉」の意味で律令時代に各地から上納される米穀や調布ちようふなどを保管する倉の名称で宮都では大蔵省が管理しました。地方でも国府や郡衙にも「正倉」が置かれ正倉院を形成していた地方役所もあったようです。また、都の七大寺や地方の官立寺院、下野国分寺や尼寺、下野薬師寺のような地方の官立寺院にも正倉はあったと考えられ、寺院運営用の物品が納められていたと考えられます。下野国府（栃木市）からは下野薬師寺の運営のための月額費用に關した書類（巻物です）のインデックスに使用された木簡が出土しています。木簡には「薬師寺月料」の文字が残っています。くるくる巻いた書類を棚に置くとなんの書類か分からなくなるため、長い巻物状の書類を巻き取る際、真ん中に棒状のものを芯としていれます。その頭のところを羽子板状につくりそこに書類名を記しておきます。よ

って一目瞭然で何の書類か分かるわけです。毎月国府から薬師寺に運営用の穀類か布が届けられていたのでしょうか。その際は下野国府の正倉が開けられ思川を渡り、東山道を使って職員が届けに来てくれたのでしょうか。

また、正倉院展に話を戻しますが、あまり展示には出ることのない資料ですが、実は下野国と深いかかわりのある品物が正倉院に残されています。一つは長さ四丈二尺（約十二・六メートル）の麻布です。この布には調布（租庸調の調）として納めた関係者の名が次のように記されています。「下野國那須郡熊田郷□子部黒田調布一端 長四丈二尺、天平十三年十月」○白布、字面に國印二箇所とあります。那須郡熊田郷は、今の那須烏山市熊田が当該地と考えられ、その住人の□子部黒田さんが納めたわけです。この□に入る文字はここでは分かりませんが、実は下野国分寺金堂跡出土の丸瓦の外表面には「熊田郷丸子部麻呂」の名前が記されています。丸子部さんの一族の方が、正倉院に納められた布を製作し下野国分寺建立の際の資金提供で瓦に名前が残された訳です。東大寺正倉院とつながりました。